

C02a 国立科学博物館での日本天文学史の調査研究

西城恵一, 洞口俊博, 中島隆 (国立科学博物館理工学研究部)

国立科学博物館(以下、科博)理工学研究部では総合研究として「近代日本黎明期の科学技術の発展史の研究」を行っている。天文学の分野では「光学機器の発達史から見た黎明期の日本の天文学の発展と普及過程の研究」を掲げ、近代日本の黎明期から現代へいたるまでの日本天文学の発展と、その一般への普及の過程を、望遠鏡等の光学機器を中心に文献とともに調査研究することとしている。モノ(実物資料)を重点的に調査研究する博物館の仕事の一環として、科博・天文ではこれまで天球儀・渾天儀など近世の天文儀器を中心に研究を進めてきた。

日本の天文学は近世まで独自の発展を遂げ、それは明治維新による西洋天文学の受容とともに断絶したように見える。黎明期の日本天文学が重点的に担ったのは、天文学の中でも編曆・報時・天測であるが、それ以後現代までに天体物理学が発展する。この発展に近世日本天文学の影響を見いだすことができるかどうか。また、普及の過程ではこれも日本独自ともいえるべき、アマチュア天文家の隆盛が見られる。こういう発展・普及の過程について機器の面からの近代日本天文学史を探ることが目的である。

この広範な目的のためには一機関の研究者では足りず、多くの方の連携・協力が必要である。最終的には独立した調査研究となるが、国立天文台・京都大学(学術用機器)や各地の博物館等の方々と共に研究目的を達成して行きたいと考える。そのため、昨年度から科博が主催して近世を含む「黎明期日本天文史研究会」を開催している。本講演ではこれらの概要と、研究成果の一部について報告する。